

ドム語の重複 – 繰り返し言葉

文学部支部 千田俊太郎

京都大学教職員組合 書休みミニ講義 (第44回) 2016-11-25(金)

1 はじめに

(1) 「si /tola (ɫdugwe) 「シューシュー (言ふ)」

1.1 地域と言語

- (2) a. ニューギニア: 世界で二番目に大きな島。
b. パプア・ニューギニア: ニューギニア島の東半分と周辺島嶼からなる、世界で一番言語の数の多い国。
c. シンブー語族: ドム語など数十の言語を含む、一つの起源に遡ると考えられる言語グループ。大きく東西のサブグループに分かれる。

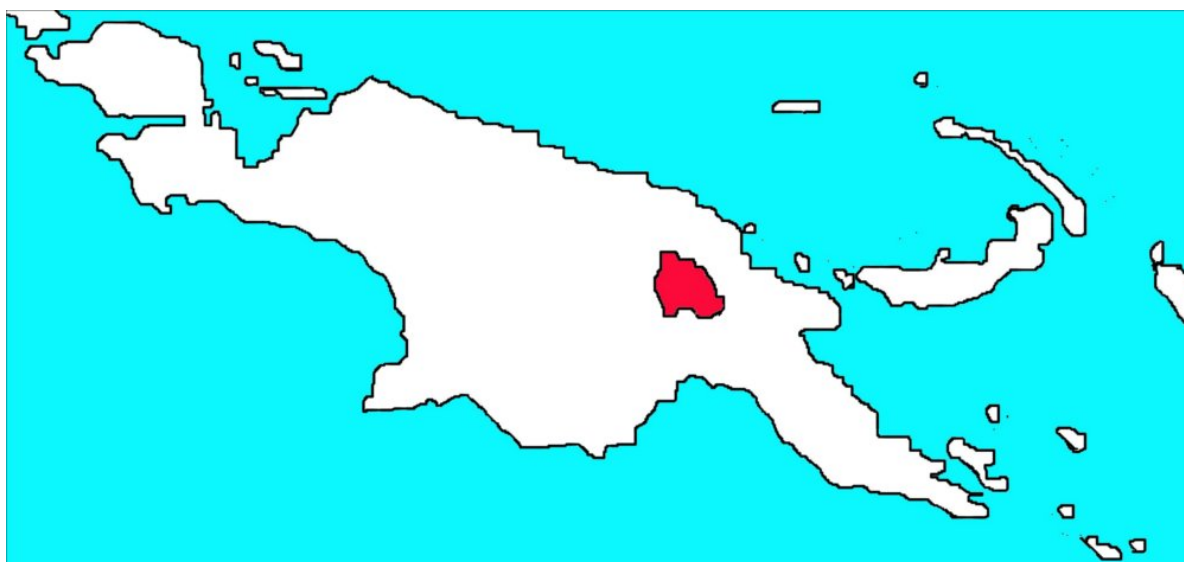


図1 シンブー語族の諸言語の分布域

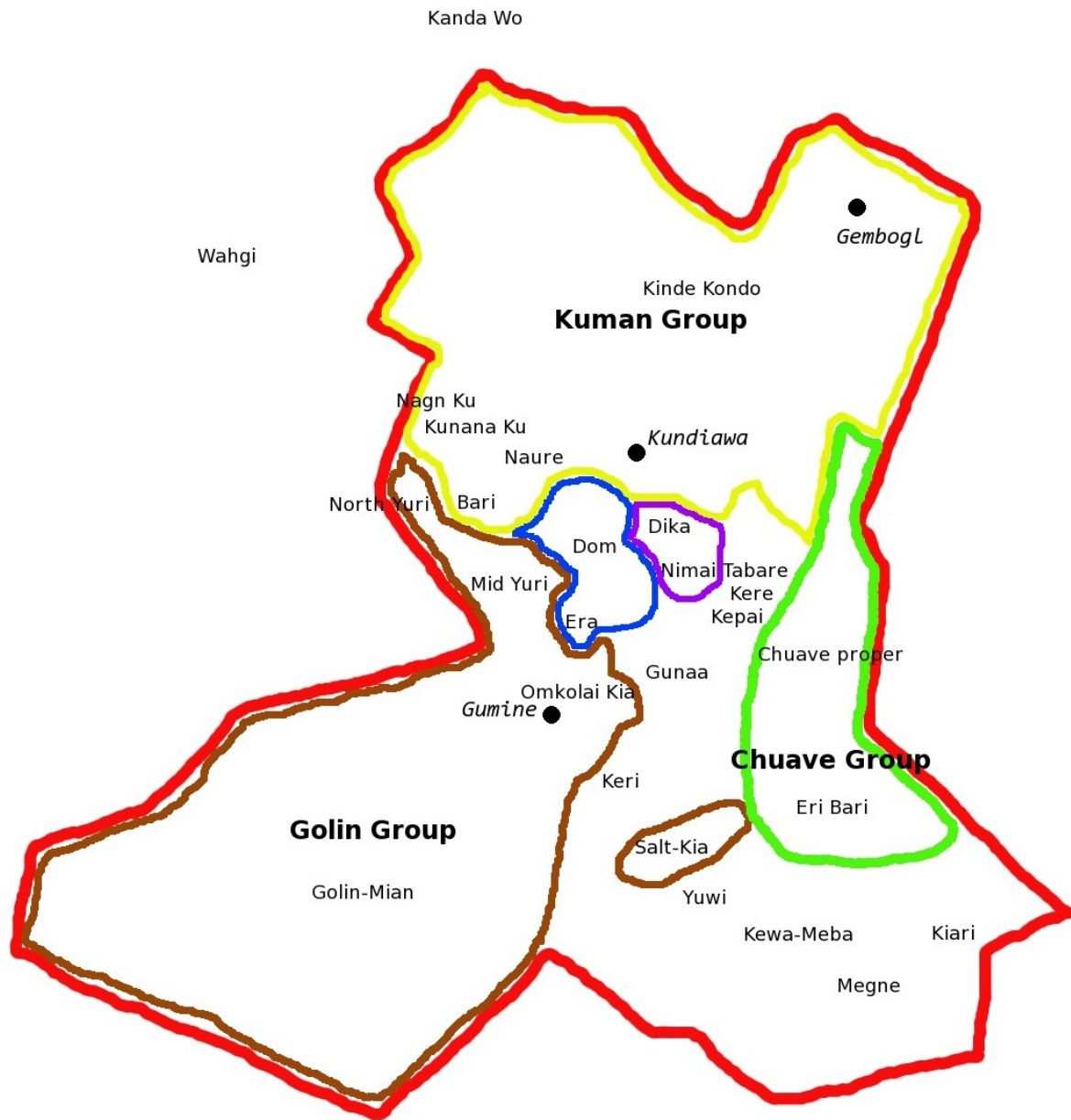


図 2 シンブー語族東シンブー語派の諸言語

- (3) a. 東シンブー語派の諸言語が話されるシンブー州北部地域は山がち
 b. 自給自足の農民 (狩獵はあまりしない)
 c. 數十年前まで石器時代

1.2 ドム語の特徴

- (4) a. 話者人口はおそらく二萬人を超えるか
 b. 方言に第一方言、第二方言、エラ方言の少なくとも三種
 c. ドム語話者はマルチリンガル (多言語話者)
 d. 共通語はトク・ピシン (廣域) とクマン語 (シンブー州北部)
 e. 語聲調システム
 f. 動詞語根が少ない
 g. 垂直方向を区分する指示詞のシステム

2 発音の仕組みと語形成の仕組み

2.1 b, d, g の発音

ドム語第一方言では b, d, g は前に鼻音が伴ふ。

- (5) a. 「ba 「月」 → [mba]
- b. 「di 「斧」 → [ndi]
- c. 「gal 「網鞆」 → [ŋgal]
- (6) a. 「gu ʌdugwe 「ブーと言ふ」
- b. 「di ʌdugwe 「チューと言ふ」

2.2 語末の e

ドム語第一方言では語末の e を発音しないことが多い (一音節語などを除く)。

- (7) a. 「omle 「目」 → [o]m]
- b. 「same 「標高の低い地域 (1400m ~ 1800m 程度)」 ↔ 「dmna 「標高の高い地域」

2.3 p, k の発音

母音間では通常有聲摩擦音。

- (8) a. 「kopa 「實の赤い油脂を食用にするタコノキ科の木」 → [ko]p]
- b. 「ike 「家」 → [i]k]

2.4 r と l の違い

次のような例から、ドム語では r と l の区別をすることが分かる。

- (9) a. Nkura 「戦ひ」
b. Nkula 「(斧の) 柄」
- (10) a. ɾar ɲdugwe 「ワンと言ふ」
b. ɾal ɲdugwe 「呼ぶ」
- (11) a. 音素: 母語話者なら発音しわけることができ、聞き分けることができる発音上の単位
b. ミニマル・ペア (最小対): ある一つの要素のみが異なる、よく似た二つの形式

2.5 メロディーの違い

次のような例から、ドム語では語彙によつてメロディーを区別することが分かる。

- (12) a. ɲal 「犬」
b. ɾal 「(三叉の) 矢」
- (13) a. ʋkɔla 「(若葉を食用にする木の名前)Ficus copiosa」
b. ɾkɔla 「(水を) 汲め」
- (14) a. Nkurl 「恐れ」
b. ʋkurl 「くるつと(回る)」
- (15) a. 下降: ɲal 「犬」, Nkurl 「恐れ」
b. 高平: ɾal 「(三叉の) 矢」, ɾkɔla 「(水を) 汲め」
c. 上昇: ʋkɔla 「Ficus copiosa」, ʋkurl 「くるつと(回る)」

一語に一メロディーなので、複数メロディーが聞こえたら複数語に分けられる。

- (16) ɲyal ɾta ɲmole ʋyel ɲdugwe
男 — めて.ss このやうに言つた.3SG.IND
「男が一人めてこのやうに言つた。」

ただし、複合 (組み合わせ言葉) や重複 (繰り返し言葉) は要素ごとに一つのメロディーをもつ。

2.6 複合

- (17) a. \backslash kopa \backslash kai 「タコノキ科の木の實を割る道具」
 (木の名前) 刺す道具
- b. \backslash omle \backslash kuime= Γ kul 「小梅檀草」
 目 ばちくり=草
- c. \backslash kepa \backslash komna 「薩摩芋と野菜、食べ物」
 薩摩芋 野菜
- d. \backslash yal \backslash nogwe 「植えて食べる、畑として持つてゐる」
 植える 食べる.3SG.IND

2.7 重複

重複では第一要素も第二要素も元の形式と少し異なる発音になることが多い。

- (18) a. \backslash deu (\backslash elgwe) 「(ゆさりと) 揺さぶる」
 b. Γ deu \backslash dau (\backslash elgwe) 「(ゆさゆさ) 揺さぶる」

(18) はよくあるパターンで、第一要素はメロディーが^か變はり、元のメロディーとは関係なく高平になつてをり、第二要素の中心的な母音が a に變はる。第二要素の最初の音が m に變はることも多い。

- (19) a. Γ ar (\backslash dugwe) 「ワン (と言ふ)」
 b. Γ ar Γ mar (\backslash dugwe) 「ワンワン (言ふ)」

「元の形式」が獨立語として存在しない重複形式もある。

- (20) a. Γ kuime \backslash kaime 「蝶」
 b. Γ bl \backslash bal 「魚」

それぞれ抽象的なレベルでは形式素として \backslash kuime、 \backslash bl に基づいた重複形式と言へる。 Γ kuime \backslash kaime 「蝶」と \backslash kuime 「ばちくり」に関係があるかどうかは分からない。

2.8 複数のメロディーからなる單語 (?)

- (21) Γ pi \backslash pola (\backslash dugwe) 「息 (をする)」

3 ドム語の s と t

3.1 [s] と [ʃ]

- (22) a. $\sqrt{\text{same}}$ 「標高の低い地域 (1400m ~ 1800m 程度)」
 b. $\sqrt{\text{si}}$ ($\backslash\text{dugwe}$) 「シューと (言ふ)」
 c. $\sqrt{\text{su}}$ 「二つ」 [ʃu]
 d. $\backslash\text{sen}$ 「鎖」 (Tok Pisin: sen)
 e. $\backslash\text{so}$ 「打て」 [ʃo]
- (23) a. $/a/$, $/i/$, $/e/$ の前で [s] (ただし $/se/$ といふ連続は固有語では見付かつてゐない)
 b. $/u/$, $/o/$ の前で [ʃ]

同じ環境に現れることがなく、「相補分布」をなす。[s] と [ʃ] は一つの音素 $/s/$ の二つの現れ方だと言へる。

3.2 s と t の違ひ

$/s/$ と $/t/$ は現代のドム語話者にとって異なる音素。

- (24) a. $\backslash\text{so}$ 「打て」
 b. $\backslash\text{to}$ 「あげろ」
- (25) a. $\sqrt{\text{su}}$ 「二つ」
 b. $\sqrt{\text{tu}}$ 「厚い」

3.3 s と t の分布

t と s のミニマル・ペアは非常に少ない。t に後続する母音はほとんどの場合 $/a/$, $/e/$, $/o/$ で、s に後続する母音は $/i/$, $/u/$ であることがほとんど。

- (26) a. $\backslash\text{ta}$ 「一つ」
 b. $\sqrt{\text{si}}$ ($\backslash\text{dugwe}$) 「シューと (言ふ)」
 c. $\sqrt{\text{su}}$ 「二つ」
 d. $\backslash\text{te}$ 「ええとー」
 e. $\backslash\text{to}$ 「あげろ」

昔は [s] と [t] が「相補分布」をなしてをり、一つの音素だつた可能性が高い。他の周辺諸言語との比較に基づけば $/s/$ と $/t/$ の違ひは音變化に伴つて発生したと言へさうである。

- (27) a. \backslash so 「打て」 ← * \backslash suo
 b. \backslash tu 「厚い」 ← * \backslash tou

非常に稀ながら s と t が交替することがある。

- (28) a. 「siula 「taula」^{こほろぎ}「蟋蟀の一種」(若い世代は「slla 「taula」とも)
 b. 「su=「tau」 「ひつたくるやうにして拾ふこと」
- (29) a. \backslash osis 「ソーセージ」(Tok Pisin: sosis)
 b. \backslash susul 「(植民地時代の制度における) 村のリーダー」(Tok Pisin: tultul)

3.4 s と t の今後

固有語においても音素的対立が生じてをり、s, t に後續する母音に制限はなくなつてゐる。借用語の流入を考へると區別は定着してゆくはず。

- (30) \backslash same 「標高の低い地域 (1400m ~ 1800m 程度)」
- (31) a. \backslash tisa 「先生」
 b. \backslash tunde 「火曜日」
 c. \backslash sop 「石鹸」

4 もう一つの重複パタン

- (32) a. \backslash di (\backslash dugwe) 「チューと (言ふ)」
 b. 「di \backslash dola (\backslash dugwe) 「チューチュー (言ふ)」
- (33) a. \backslash si (\backslash dugwe) 「シューと (言ふ)」
 b. 「si \backslash tola (\backslash dugwe) 「シューシュー (言ふ)」
- (34) 「pi \backslash pola (\backslash dugwe) 「息 (をすする)」
- (35) a. \backslash C_ii
 b. 「C_ii \backslash C_iola
- (36) a. \backslash gu (\backslash dugwe) 「ブーと (言ふ)」
 b. 「gu \backslash gela (\backslash dugwe) 「ブーブー (言ふ)」
- (37) a. \backslash pu (\backslash dugwe) 「フーと (吹く)」
 b. 「pu \backslash pela (\backslash dugwe) 「ブーブーと (鳴る)」

i や u のやうな高母音を持つ上昇メロディー語根を元にして、第二要素では後舌性の^{ぎやくてん}逆轉する中母音 (o, e) を使ひ、-la を添へる螺旋階段を降りてゆくやうな洗練されたパターン。

(38) a. $\vee C_i V[+high, \alpha back]$

b. $\uparrow C_i V[+high, \alpha back] \vee C_i V[-high, -low, -\alpha back] IV[+low]$

	前舌	後舌
高	i	u
中	e	o
低		a